日本におけるシンクレティズム再考
――教育思想的角度から――

黄　海玉

1. 序にかえて――日本におけるシンクレティズム再確認の意義

日本におけるシンクレティズムの主要な形態は〈神仏習合〉として捉えられているところが多い。在来のカミと外来のホトケの接触と交渉による神仏習合は確かに、日本人の一般的普遍的な信仰形態として長い間続いてきた。しかし、日本人の形成や思想的パターンを確認するためには、神仏習合では些か説明がつかないところが存在する。シンクレティズムを文化的思想的角度から捉え、その構造ないし構成について確認することは、その文化における人間形成の基盤を確認する上で必要なことであり、それは教育思想の根源的土壌を確認することにもなる。このような問題意識の根底には、日本における人間形成――広義の教育――を文化との相関関係において解釈を行い、解明しようとするねらいがあり、本研究はそのための準備として位置づけられる。このような立場にたって日本のシンクレティズムを捉えるとき、神・仏に合わせ儒教の存在も考えなければならず、それは神儒仏三教の構成によるシンクレティズムとして捉えることができる。

宗教や思想の問題は、相互に生み出し生み出される社会と文化との関連において捉えることがもっともよいアプローチである[1]。日本文化の特徴の一つとしての宗教に着目し、その構造や文化を構成している他の要素との関連を考察することは日本人の形成を考える上できわめて重要なことである。なぜなら、文化の諸要素の中でも、宗教のもつ超越性や規範性、批判性といった部分が個人と社会に及ぼす影響力は遥かに直接的で大きく、宗教が他の要素の土台となることも多いからである。したがって、文化における宗教の捉え方、または両者の関係を社会という、人間が生まれ、生活を営み、その中で自己と他者を形成し、死んでいくという、もっとも基本的で具体的な場において捉えることは、きわめて重要なアプローチであるということができるのである。

三教思想を日本の文化的思想的基盤として捉え、古代より近世に至るまでのその流れを確認することはつまるところ、日本人の形成についての文化的土壌全体という視角からのアプローチであり、日本文化の源流と基盤という総体的視点からの確認となることでもある。このような視点に立って日本の文化的基盤を宗教的思想的構造の特徴において捉え、日本人の形成的意義を探ることは、教育乃至人間形成に関する研究と課題が益々細分化されていながら、昨今のさまざまな人間的社会的問題の発生に対してなお試行錯誤や対処療法的措置が続いている現状において、その解決への綜合的な方向付けと手掛かりにつながることが期待できよう。

1　宗教と文化の関係については、源了圓『文化と人間形成』（第一法規、1982 年）を参照されたい。

2. 日本における三教思想とその流れ

日本の思想を時代ごとに辿っていくと、いずれの時代にも三教の構成でない時代はかつてなかったことが確認できる。古代より儒教、仏教の流入とともに形成された神儒仏老荘によるシンクレティズムは、日本の文化的思想的基盤をなす上で一つの流れをつくってきた。日本の文化的思想的土壌が神道・儒教・仏教の独立的で相剋的、かつ相互依存的な関係の、三教のシンクレティズムのなかで形成され、基盤を固めてきたことは明確な事実である。それは古代における儒教と仏教の伝来により始まったことであり、形を変えながらも脈々と続いてきていることである。

では以下において先ず、このような三教の流れを時代の順に沿って整理してみたい。

(1) 十七条憲法に見る三教

日本における神儒仏のシンクレティズムとなる最初の事例は、推古朝にまで遡って十七条憲法に確認することができる。十七条憲法は朝廷の王権支配のための政治的規範であり為政者のための政治道徳であるが、周知の通り、儒教・仏教・法家を含む多くの中国古典を用いて構成されている。

聖徳太子の制定とされている十七条憲法については、早く江戸時代からその真偽や太子実在論に至るまで様々な議論が行われてきたが、いずれにしても、日本古代の朝廷において儒教・仏教・法家諸思想を統合して十七条憲法が作られたという史実に的をおいた場合、十七条憲法は日本における神儒仏三教のもっとも早い例となる。

十七条憲法は神道・儒教・仏教・法家の諸思想を統合して作られているが、もっとも、当時の朝廷は呪術・呪力による神祇祭司の信仰に基づく支配であり、仏教もまた在来の神をたすける超越な存在として受け入れられたが、しかし、神仏二教のみでは、王権指導の律令国家を効果的に支配するシステムを作ることができなかったのである。

したがって、十七条憲法が直接日本人の文化的思想的形成に役割を果たしたとは当時の段階ではまだ言えないが、国家の専制君主の支配とその維持のための政治的規範であり、統治的道徳であるものが、古代日本の朝廷において誕生し、その後の政治的倫理の典範として用いられてきたことは、極めて重要な意味をもつ。そして何より、神儒仏の三教を統合して作られた一つのまとまった形としての歴史的思想的遺産の価値は高く、また、のちの三教思想のための布石的役割を果たしたところに、十七条憲法の思想的意義が認めなければならないのである。

(2) 空海の『三教指帰』に見る三教

大乗真言密教を開き、弘法大師の名でも知られる空海（774-835）は、奈良期から平安期を生きた日本屈指の名僧の一人である。家庭的環境により、もともと都の大学で儒学を学んで、仕官することを目指していたようであるが、しかし一人の沙門によって「虚空蔵求聞持法」という瞑想法を教えられてからは、もっぱらその修行に励み、ついに明星影向の体験を得るに至ったという。かれの主著には周知の通り、『三教指帰』と『十住心論』と称されている『秘密曼陀羅十住心論』（十巻）があるが、その共通点は、儒仏道三教論を中心に形成されているということである。『三教指帰』は入唐前の 24 歳の時の著である『聾瞽指帰』に、入唐求法より帰朝した後、大幅の修正

を施して出来上がったものである[2]が、『十住心論』は空海 57 歳の、思想の成熟期の著である。したがって、空海の思想は三教を基軸に展開されたと見ることができよう。

空海は仏教に帰依した後も、儒教と道教を捨て去ることをせず、三教に深浅をつけ、段階的に儒教から道教、そして仏教へ辿りつく修行を説いている。また、空海の信仰的世界に古代神道のシャーマン的な影響も極めて大きく、山岳修行を通して神仏習合の世界を経験している点も忘れてはならない。

(3) 五山文学・禅に見る三教

中世から近世初頭にかけて、仏教の末法思想の名残に加え、大陸からの禅宗とともに流入した宋学は宗教的思想的世界に大きな変化をもたらすことになる。そのような世相と相俟った形での宋学の体系的宇宙観、世界観の流入は日本における朱子学の広がりを一助することになり、仏教から儒教の世界に切り替えた者も多く、その代表が藤原惺窩（1561–1619）である。

五山文学は日本における禅林文学のことを指すが、禅僧によってもたらされた禅林文学は日本中世の漢文のレベルを大幅に引き上げ、文学の世界を飾ることになる。日本における五山派は禅宗とともに中国における制度をそのまま移入したものであるが、その高度の文学性とともに、儒仏道の三教一致思想を特徴とする。

日本の五山文学の双璧をなしている義堂周信（1325–1388）と絶海中津（1334–1405）は、政治的にも共にきわめて高い影響力をもつに至った二人であるが、その儒教・道教に対する態度は異なっている。周信は将軍足利義満に『中庸』を講義するほど、宋学の理解が深い人であったようであるが、彼が仏教の理解のために儒教と道教の書物を用いて、儒教と道教は仏教に含まれていると考えたのに対し、絶海は儒仏一致思想を完全に認め、その上道教思想を全面的に受容し、三教一致の思想を形成した。

また、禅宗の中でも、三教一致を提唱する臨済や黄檗のような場合と、曹洞のように三教一致を批判する場合とに分かれる。しかしいずれにしても、議論の対象として、また禅学の修養のための基礎として、三教が広く用いられたことは確かであり、五山における三教思想は禅学のための知識的体系の役割をなしたということができる。そして禅僧など知識層において、時代の下るにつれて三教思想が広がっていることを物語るのである。

(4) 武士道に見る三教

武士道を論ずる上で欠かせない人物として、先ず山鹿素行（1622–1685）を挙げなければならない。素行の思想はいくつかの変遷を辿るが、三教一致の時代はその中の一時期と区分されている。彼は「若年の折高野山の按察院光宥より両部神道を、広田坦斎より忌部神道をうけたこと、また祖心尼との深い関わり、木庵禅師等の僧侶たちとの交わり」をもっていたことが、その思想に「一方より観れば迷信にも近き所作ある[3]」と指摘される背景であったようである。

そして、武士道を語る上でもう一つ欠かせないのが、武士の規範として名高い『葉隠』であるが、その隠れた著者として知られている石田一鼎は、「神道・仏教・儒教の三教一体が神国日本の

2　星宮智光「弘法大師空海の三教論と十住心体系」『高野山大学　密教文化研究所紀要』別冊 1、1999 年 1 月。
3　中山広司『山鹿素行の研究』神道史学会、1988 年、252–253 頁。

原理であり、武士道はこの思想と相応の関係にある」としているところから、「一鼎の武士道論は神儒仏三教一体の武士道と呼ぶのがふさわしい」[4]とされる。

『葉隠』における中世の禅思想の流れを受けての仏教思想と支配階級の理論体系としての儒教倫理の伝承、そして当時確立されはじめた神国意識に基づく神道的観念の、神儒仏三教をその生き方における価値観と行動規範とする武士道は、支配階級における倫理体系の理論的なものとしての意味をもつとともに、後の日本人の修養の規範として影響を与え続けている。

(5) 唯一神道に見る三教

〈神道〉の名は、既に触れたように、日本固有の神祇信仰に、儒教・仏教・道教などの教理を取り入れて成立したものである。したがって、神道の経典はもともと存在せず、その呪術などは主として口伝の形式で伝えられていた。

唯一神道は室町時代に吉田兼倶（1435–1511）により、当時の儒教・仏教・道教・陰陽思想を融合してつくられたもので、その教えは、「神道こそあらゆる教えの源であり、仏教も儒教も神道から分化したものにすぎない、仏・菩薩も実は宇宙の本体たる神の垂迹である（反本地垂迹説）」[5]とするなど、神本位の主張を特徴とする。

斎藤英喜は、吉田家の「吾国ノ神ハ、天地ニ先スル神也」の説にいわれている、日本の神は天地に先立って天地を創造した神であるという教えは、鎌倉時代の卜部兼直の『神道大意』に国常立尊＝虚無大元尊神の説、さらにこの神が世界の創造神であることが明確に述べられているところであるが、「惟足が描きだす国常立神＝虚無大元尊神は、こうした朱子学の『太極』の理論を使って、『日本書紀』のクニノトコタチを、天地創成を主宰する超越＝内在の神へと読み替えた」[6]としているところに加え、「一大三千世界」「太千」など仏教的用語が用いられており、「儒教的発想と仏教的世界観がドッキングされている言説」[7]であるとした。

また、出村勝明は、吉田神道は教法（教理・教学）部門と行法（祭式実践）部門とに分かれるが、「それを具さに見ていくと、道教的要素がきわめて多いのに驚かされる」として、それについて詳細な検討を行っている[8]。

唯一神道における三教は、吉田神社が近世に入って全国の神社の中心となるなどの政治的な権威からしても、三教思想の庶民層における宗教的・信仰的世界への浸透に橋渡しの役割を果たすことになったと見ることができる。

(6) 近世の思想的思潮としての三教と石門心学

近世初期における思想界の動向として、神道・儒教・仏教――三教の混合された庶民思想が隆盛をみたことは周知のとおりである。儒仏道三教を題材として、中国において大衆教化の資料と

4　笠谷和比古「武士道概念の史的展開」『日本研究』第 35 集、国際日本文化研究センター、2007 年 5 月、248 頁。
5　高橋美由紀「神道思想の形成」、佐藤弘夫編『概説日本思想史』ミネルヴァ書房、2005 年。
6　斎藤英喜「近世神話としての『古事記伝』――「産巣日神」をめぐって」『佛教大学文学部論集』第 94 号、2010 年 3 月、28 頁。
7　斎藤英喜、前掲論文 29–30 頁。
8　出村勝明「吉田神道の道教的要素について――『神祇道霊符印』を中心として」『神道史研究』第 37 巻第 4 号、1989 年。

して作られた『勧善書』が日本にも輸入され和訳されており、また神儒仏三教を用いた教訓的啓蒙的な内容をもつ談義本が多く出版されるなど、三教思想は庶民の教育教化の面において広く手軽に用いられていた。それらの多くは教訓的な勧善懲悪を内容とするものであり、しかも仏者がこのような三教混合の書物を所持していた記録[9]からも、既にかなりの普及状況であったと見ることができる。

これらの思想的思潮の影響を受けて生まれた石門心学もまた、その教祖石田梅岩の「神儒仏三教いずれにも依らず」の思想をモットーに全国に広がっていた。また、梅岩の師小栗了雲は、「嘗て性理の蘊奥を究め且釈老に通じ」[10]と記されているように、儒学を究めた学者でありながら、同時に禅を修めた黄檗宗の僧でもあったようであるが、その流れは中世日本五山の禅と文学に端を見ることも可能であろう。

以上見てきたように、日本の信仰的文化的土壌としてのシンクレティズムは、神道が自然崇拝を中心としていた原始的神祇信仰から、儒教・仏教・道教などとの接触により宗教的体系を備えた神道へと発展をしてくるにつれ、次第に形成された現象である。外来文化の受容からは、当時の神祇信仰の宗教的性格の未確立と日本社会の未熟さを見ることが可能であるが、その反面においては、日本の古来の神の開放的、受容的性格とともに、外来文化の実用的な採用の仕方も合わせて確認することができるのである。このようなシンクレティズムは日本の古代に始まり、初めは朝廷における国家支配という極めて特殊で限定された範囲で生じているが、次第に宗教的・知識的階層に広がり、近世に至っては庶民層における信仰的な意識に浸透し、生活世界における通俗道徳として再構築され、さまざまな形態をなして存在しつづけたが、それはあるいは人物における思想の中から、あるいは書物などの作品から確認することができる。その中で、三教は互いに刺激し、衝突と摩擦を経て、吸収・補完されながら、緊張関係を保って存在してきたのである。

3. 日本におけるシンクレティズム認識とその所以

神儒仏三教思想はその否定論も含めあまり多く議論され、スポットを当てられてきた問題ではない。そして日本における三教思想に関する今までの研究は、どちらかというと一つの限定された個別の事象や人物について、その思想の構成的要素としての三教の存在と三者の関係の特徴解明を主とするものであり、三教思想を広く日本の思想（史）的文脈上における一つの流れとして検討することは極めて少なかったということができよう。

しかし、いずれの時代にも三教でない時代はなかったことが確認できる。神仏の交渉が始まる以前、儒教の伝来以来、三教はそれぞれ独立したものとしての機能や意味、役割を保ちながら、相互依存・融合し、複合的機能を果たす形で存在してきた。三教の教理的世界観と信仰的儀礼的部分は摩擦を起こしながらも、相互に影響され補完されてきたのである。

神儒仏それぞれの宗教的思想、あるいは神仏による習合に関する研究は盛んに行われながらも、

9　花田富二夫「近世初期三教思想の一資料『勧善書』に関して（1）」『教養・文化論集』第 6 巻第 2 号、2011 年 3 月、75 頁。

10　柴田実『石田梅岩全集』下〈改訂再版〉、清文堂出版、1972 年、641 頁。

中国や韓国[11]のように三教をトータルに扱った全面的で総合的な研究はあまりされていないのが実情である。日本の多元的宗教構造としての〈シンクレティズム〉に対する一般的な理解と研究は主として〈神仏習合〉に集中している、あるいは〈神仏習合〉を日本のシンクレティズムそのものとして捉える傾向がある[12]。

この背景には加地伸行も指摘しているように、日本の儒教が中世（早くは平安末期）から宗教としての要素を仏教に譲っている点[13]が挙げられよう。宗教としての儒教の祖霊崇拝の観念と儀式は神道と仏教によって取って代わり、日本の儒教は長い間、主に政治倫理と社会道徳における理論的根拠として機能してきた。しかし、はじめから儒教そのものを日本人の思想的形成の基盤から外すことは、神仏習合以前の原始神道に対する儒教的な影響と、中国・朝鮮半島を経由した日本仏教が既に身に付けた儒教的な要素を抜きにした見方である[14]と言わざるを得ない。

その主たる原因となるものについてまとめてみると、①神仏習合によるシンクレティズムが主流をなしており、日本におけるシンクレティズム自体を神仏習合とする認識が相当深くかつ普遍的になされていること、②中国本土において形成された〈三教一致〉思想を構成する儒仏道のうちの道教の輸入が成功しなかったこと、そして③儒教の宗教性の脱落・限定と並んで、それが制度・儀式としての神道・仏教により代替されたこと、などが考えられよう。また、このような儒教理解・儒教研究の限定とともに、古代における儒教の受容が仏教の場合と異なり、無条件的で無抵抗的であったことも、日本におけるシンクレティズムを意識的無意識的に神仏習合という現象に限定して捉えることの一因となった、と言うことができよう。

4. 代にかえて

三教思想の流れは古代における儒教・仏教の受容とともに始まり、現在に至るまで様々な変容をなして存在してきた。三教思想の表れとしての事象はそれぞれの時代に常に確認することができる。三教のシンクレティズムを系譜づけることは、日本の思想と文化の基盤を全面に根底から捉えるために必要な作業となる。

日本におけるシンクレティズムという宗教的構造の特徴を、日本の文化・思想との関連において捉えるとき、神仏習合ではその全体像を捉えることはできない。それは、日本文化における儒教の宗教的思想的機能を閑却した限定された理解に基づく捉え方であり、現に儒教脱落の諸相は至るところにおいて露呈しているのは改めて説明する必要のないことである[15]。しかし、三教の関係は神仏習合の上に儒教を乗せれば済むような問題より遥かに有機的であり、その相関関係はきわめて複雑で多岐にわたっている。

本研究においては、宗教学的性格に加え、思想史上の概念規定など、少し手に負えない面もあり、したがって系譜の整理というよりシンクレティズムの事象の簡単な羅列にとどまるなど、単

11　韓国の三教一致の場合は、例えば徐慶田（「韓国における儒・佛・道三教の交渉」『第 14 回国際佛教文化学術会議発表要旨』佛教大学、1995 年）のような、系譜的な整理を行った研究がある。
12　華園聡麿「『シンクレティズム』概念の再考」『東北大学文学部研究年報』第 46 号、1996 年 3 月、163 頁。
13　加地伸行「『孝経啓蒙』の諸問題」（日本思想大系 29　中江藤樹）岩波書店、1980 年、425-426 頁。
14　加地伸行「儒教的仏教そして仏教的儒教」『仏教』35、法藏館、1996 年 4 月。
15　島田虔次「儒教における生けるもの」『中国思想史の研究』京都大学学術出版会、2002 年、606 頁。

なる問題提起に終わってしまった部分も少なからず存在する。それぞれの事象が如何なる特徴を持ち、機能を果たして後世に展開・継承されていったか（あるいは変形し消えていったか）という、文化的思想的観点からの深い考察ができなかったことも、今後の課題として残されている問題である。また、日本の文化的思想的基盤を三教のシンクレティズムという宗教的構造から確認する作業においても、シンクレティズムの概念と形態を含め、より宗教学的な考察が今後求められる。汎神論・多神教とされる日本の多元的宗教形態におけるシンクレティズムの究明は、日本の思想的文化的エートスと日本人の形成との関連において深いかかわりをもつのである。